つれづれなるままに　第18号

令和２年１月31日（金）発行

校長　深谷　浩一

ボランティアって何だろう！(4)

～ボランティア活動20年の歩み～

22年前，アメリカ出身のトッド先生の意見に対して，本校の生徒がどのように感じ，どのような反応を示したかについて，前回までにご紹介しました。

さて，この22年前のトッド先生の意見に対して，現在の生徒たちは一体どのように感じるのでしょうか。今回，鈴木先生が英語の授業の中で３年１組の生徒たちに尋ねてくださいましたので，それらをご紹介したいと思います。

しかし，その前に，この20年間の日本におけるボランティア活動の状況について概観しておきたいと思います。

「国連ボランティア」に脚光！

1993年，今から27年前の４月，内戦後のカンボジアで選挙監視員として奮闘していた国連ボランティアの中田厚仁（あつひと）さんは，公平な選挙が行われることを妨害しようとするゲリラグループの銃弾に倒れました。25歳の若さでした。

それまでも青年海外協力隊（JICA)などの海外でのボランティア活動は紹介されていたものの，日本国中にボランティア活動に対する関心が高まったのは，この事件がきっかけであったように思われます。

中田厚仁氏（wikipediaより。）

阪神・淡路大震災を契機に

国連ボランティアの中田厚仁（あつひと）さんがカンボジアで凶弾に倒れた２年後の1995（平成７）年１月17日，日本では，兵庫県南部・淡路島北部で最大震度７，死者行方不明者数6,437名という，未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災が発生しました。今月の17日で発生以来，丸25年となりました。

この震災を契機に数多くのボランティア団体が生まれ，活動を始めたのもこの時期でした。

2002年，「かものはしプロジェクト」始動！

2002年（平成14年）7月18日に任意団体として設立された「かものはしプロジェクト」は，児童買春問題の解決をミッションに掲げる特定非営利活動法人でカンボジアを拠点として活動を始めました。農村の貧困が児童買春の一因であるとの考えから，職業訓練と雇用の場の創出を通じて親や子どもたちの経済的な自立を目指しています。現在，青木健太氏，村田早耶香氏，本木恵介氏の３名が共同代表を務めています。

東南アジアの児童買春問題を啓発する活動を続けていたフェリス女学院大学の学生村田氏と持続可能なビジネスモデルによって社会問題を解決する事業を起こしたいと考えていた東京大学の学生青木氏，本木氏の３名が任意団体として設立した組織。2004年（平成16年）9月に特定非営利活動法人の法人格を取得し，カンボジアで本格的にボランティア活動を始めました。

村田早耶香氏（Wikipediaより。）

平井廣二氏，「茨城・ネパールに学校をつくる会」設立！

平井廣二氏

ネパールのヒマラヤを訪れた際に，貧しい生活のため教育を受けられずにいる住民の存在を知り，「茨城・ネパールに学校を造る会」を設立して，ネパールに学校を作るために尽力した人がいます。中学校長を退職後，1995年（平成７年）に「茨城・ネパールに学校を造る会」を設立，寄付を集め，同国のシンドパルチョーク郡に８校の小・中・高校を建設したのです。この人の名は，平井廣二（ひろじ）氏といいます。

「教育の場を提供することは，子ども達の命を守ることだ」と信じて活動し，本校で開催した文化祭「蒼星祭」にもネパール人とともに訪れ，学校が不足しているネパールの状況などについて語ったり，パネル展示等も行ったりして，来校者に募金の必要性を訴えていました。当時私は生徒会を担当し，本校の窓口となっていたので，精力的に活動していた平井さんのことはよく覚えています。

2007年（平成19年），平井さんはそれまでの功績を認められ，公益財団法人　社会貢献支援財団から社会貢献者表彰を受賞しました。その時の「受賞の言葉」は以下のとおりです。

教育を受けられないネパール山村の住民の生活は，貧困，搾取，人権，健康，食との闘いです。学校建設，教育の享受は人々の願いであり，夢です。私達茨城のNGOは，ネパールの学校建設地まで足を運び8つの学校を建設しました。この活動を止めてはいけないと思います。副賞は今後の活動資金とし有効に使いたい。（公益財団法人　社会貢献支援財団のＨＰより。）

ネパールの子供たちの登校風景
（Wikipediaより。）

平井氏の足跡

平井さんは1977年（昭和52年），茨城大学学術調査隊の隊長として，ヒンズークシ山脈のウドレン・ゾム中央峰の登頂を成し遂げました。その際，現地の宗教，教育などについても調査を行った結果，子供達が自分の名前すら書けない実態を知り，教育の重要性を痛感したそうです。多くの子供達が野外で学んでおり，文具も足りない状態であることを知り，「自分にできることからやってみよう」と活動を始め，1995年（平成７年）に「茨城・ネパールに学校をつくる会」を設立したのが，始まりでした。

会として，募金活動で集まった約150万円で老朽化が激しかったダルモダイ高校の新校舎の建設に着工すると，平井さんは，その後12回にわたりネパールを訪問し，現地調査を重ね，小中高８校の学校建設に携わってきたのです。「栄養や医学の知識がない母親が子育てに困ったり，計算が分らない父親が給料の計算をごまかされたりする。知識があれば，食べるのに困ったり，子供を売らざるを得なくなることもなくなるでしょう。学校に行くのは知識を得るためだけでなく，命を守るためでもあるのです。」と平井さんは話しています。

平井さんの活動は，学校建設だけでなく，ユネスコ協会が主管するパタンアシュラム（母子自立施設）にいる子供達への食費援助やマイテイネパール（人身売買で売られた子供を連れ戻し，国内で自立のための教育を行う施設）への食事援助と教育教材の支援などネパール訪問の度に広がっていったのです。

◇　◇　◇

このような素晴らしい日本人がいることを私たちは知るべきです。特に，最後に紹介した平井さんは極々身近にいる方で本校とも深く関わり，皆さんの先輩方に対してボランティア活動の大切さを語ってくれました。ちなみに，現在本校に勤務している平井先生は，この平井廣二さんの息子さんです。（つづく）